

眠れぬ夜の百歌仙夢語りへ七十八夜◇

何が楽しくて野郎ばかり三人で飲んだのか分からない。

その時なぜかパンツの話になった。

オイラが「俺はトランクス派だよ。風通しがよくて蒸れないから」というと、髪の毛がすだれのY君がのたもうた。

「いやいや、断然ブリーフだね。締めりがあっていい。第一漏れないからな」

「確かに」

思わず頷いてしまったオイラはお漏らしジジイか。

そこで黙って聞いていたむつつり助平のK君に「おい、おまえはどっち派だ」と聞いたら胸を張って答えたね。

「それがどうした、俺は紙オムツ派だ」

心なしか目が虚ろだ。

そうだよなあ。気がつけば古希。古来稀なりという言葉にドキリとする。坂道を上がれば心臓が鯉みたい
にバクバクする。後期高齢者という棺桶に片足を突っ
込んでいるんだから。

神も仏もないとはこういうことか。

下ネタ続きで申し訳ないが、有名なエピソードを一
席。いや、これは神かけて真面目な下ネタだ。

和泉式部といえは恋多き女として知られる。熊野詣
に出かけた時のこと。本宮の近くまできたら、何と月
のものが始まってしまった。不浄の身では参拝するわ
けにはいけない。

仕方なくその場から熊野権現を伏し拝んだという。
その時に詠んだ歌がある。

晴れやらぬ身にうき雲のたなびきて月のさはりとな
るぞ悲しき

月のものまで詠んでしまうという、和泉式部の歌に
対する情熱にはただ脱帽あるのみだ。さすがとしか言
いようがない。しかもこれには後日談がある。

歌を詠んだ夜、和泉式部の夢枕に熊野権現が現われ
もろともに塵に交わる神なれば月のさはりもなにか
苦しき

と歌を返してきたというのだ。これは「紀伊続風土
紀」にあるのだが、伏拝という地名はここからきてい
るといふ。ふうむ、伝説恐るべし。いや、神様も粹な
ことを言うもんだ。どうです、真面目な下ネタだった
でしょう？

そんなことを書いたから罰が当たったのか、12月
に入って人生初のインフルエンザB型にかかった。

「当選おめでとうございます！」

医者の結果を伝えるとマグロの奥さん、目をウルウ
ルさせ、ここぞとばかりに娘と孫に一言。

「近寄っちゃダメ、口をきくのもいけないの、目を合
わせたらおしまいよ。それだけでうつるからね」

俺は妖怪人間ベムか。おかげで一週間アルカトラズ
の独房生活を味わったぞ。

余談だが、昔読んだ朝日新聞のコラムに工藤雅世と
いう人がこんなことを書いていた。

「私たちは他人と出会ったとき、緊張や警戒心から、無意識に相手との間にある空間を保とうとする。この空間を、心理学ではパーソナルスペースと呼ぶ」
そしてこのパーソナルスペースの距離は民族や文化によって違うというのだ。

確かにパリのカフェではテーブルが混みあつた状態で配置されていても人々は違和感がない。アラブ人やラテン系の民族でもそうした傾向があるという。

一方アメリカ人やイギリス人は警戒心が強くスペースを大きく取るというデータがあるそうだ。日本人もこの部類に入るのかも(ただしテロが頻発する現代ではこれらのデータは信憑性に欠けるが)。

この大きさを知る「接近実験」という方法によれば女性は男性が近づいてくると大きなスペースを確保しようとするが、男性は逆に女性が近づいても大きなスペースを取ることがないという。男はみんな下心があり、女性は「男はみんな狼よ」という歌(昔だから若い人は知らないだろうな)がある通り原始的な警戒心が感覚的に出るのだろう。

なぜこんなことを書いたかというと、家族とのパーソナルスペースについて考えてしまったからに他な

らない。

さて無事に「アルカトラズのお勤め」を終えて久しぶりにアルコールにありついた。おでんをつまみにチビリチビリやっていると、今や安上がり制作のテレビ番組には欠かせない幻の温泉宿という番組をやっていた。

修験者が宿の裏で瀧に打たれている。

孫の樹が「源泉かけ流しだね」と言った。確かにその通り。むしろかけ流しというより垂れ流しと言ったほうが正しいかも。

気がつけばもう高校二年生。先日のテストで赤点があつたらしい。頭抱えて

「ドツボだ〜」

それも2科目だから

「ドツボのミックスジュースだ〜」

「人生の交差点で轢かれた気分だろ。きっと赤信号だったんだよ」と慰め？たら「そんなところに信号機はない」とプンプン。

「少しは勉強して人間の見本になってみる」といったら、それは「理科室にあるよ」だと。それは人体模型のことだろうが。

ああ言えばこう言う、社会に出ても口だけが達者な嘘つきな大人にはなってくれるなよ。

「ただいま〜」

そこへ正月のお宿下がりで、すっかり太めになってしまった長女の綾夢姫が孫の明里ちゃんを連れて帰ってきた。

夫とうまくいっていないのか多少ノイローゼ気味か。玄関を開けていきなりマグロの女房殿に抱きついた。

「充電できた〜」

そうか、バアバはバッテリーだったのか。しかも、家において分かったことがある。

この綾夢姫が「(娘の) 明里はいくら食べても二時間経つともうお腹が空いたっていうのよ。凄く燃費が悪くて困っちゃやう」とこぼすのだ。(知らなかったよ。明里は外車だったのか!) そりゃあ、母親に似たんだろう。早く気がつけよ。

ふと見たらテレビの番組で、司会者が日本語の曖昧さについて外人にインタビューしている。文化の違いで日本語はストレートに言わない言葉がたくさんある。しかも訳せないというのだ。考えてみれば新古今

和歌集の歌などそのよい例だろう。花（サクラ）が散るさまひとつとっても、そのまま「桜」と言わずにサクラと分らせるのが日本語なのだ。古典では桜といわなくても「花」は桜を意味するように。

それは四季がハッキリしている日本の風土や奥ゆかしいことがいとされる文化と関係があるわけだ。

しかし現代では付度という言葉がひとしきり話題になった。権力者の顔色を伺う官僚が、公私混同で利益誘導を画策しようとした卑しい政治家との悲しいなれ合いと言える。かつては快慶運慶の「阿形」「吡形」像が語源の「阿と言えば吡の呼吸」と似ているのだが、阿吡は正しい意味での付度である。

だから付度がすべて悪いとは言わない。曖昧な表現方法は日本語そのものである。要はその裏に隠された意味なのであると思う。

そんなこんなを考えていたら嫌になった。年金は減らされるわ、薬代は増えるわ、で首括る一歩手前。こんな政治家を誰が選んだのだ。

オイラはそんな時地下に逃げ込む。正月から疎外されるのは慣れているし喧騒から逃れて自分の心と対話する唯一の方法だからだ。しかし暮れに大掃除する

気分もしなかつたので、地下室はホコリだらけ。やむを得ぬ。

すぐに目に入ったのは積んである本の一冊。パラパラとめくると久々に塚本邦雄の俊成卿女の一節が飛び込んでくる。それはオイラが痛切にシンパシーを感じた瞬間であった。

「承久の乱を境として俊成女は宮中を退く。その後、数年して堀川大納言正二位となった通具が死ぬとしばらくして、浮世を避けるように嵯峨に棲む。そうして長男具定は三十七歳で侍従正三位のまま歿し、定家も八十一歳で一期を終ると彼女は風に追われるように京を離れ、七十を過ぎた老躯の最後の拠、播磨の越部へ赴きここに居を定める。」（筑摩書房、日本詩人選 23 「藤原俊成、藤原良経」 塚本邦雄）

俊成卿女は俊成の養女であり、言わずと知れた定家の姪で義妹に当たる。三十を過ぎたころからその歌の才覚を後鳥羽院に認められた大器晩成型歌人だ。建仁元年（1201年）の千五百番歌合せで衝撃的な登場をする。

なぜこんな長い文を写したのかというと、その「新古今和歌集」の最後の生き残りとなった彼女の一生に

興味をそそられたからだ。彼女が仕え、学び、肩を並べた歌人たちはすでにことごとく世を去っていた。

たとえば天才少女宮内卿はとうに十代でみまかり、式子内親王、小侍従、雀連、良経、兼実、雅経、俊成、小侍従、順徳院、守覚法親王、慈円、有家、兼実、通具、土御門院、家隆、長明、後鳥羽院、順徳院、そして定家…。

友であり切磋琢磨した歌の敵でもあつた人々の面影、齢八十を過ぎて去来するものと消えゆく新古今の世界。なんと物悲しい現実か。時は無常に過ぎてゆく。思えば五十年來の親友を相次いで失った自分に何と似ていることか（私情を挟んでスミマセン）。

あくがれて寝ぬ夜の塵の積もるまで月に払わぬ床のさむしろ

（新古今和歌集卷四、秋上）

橘の匂ふあたりのうたた寝は夢も昔の袖の香ぞする

（同卷三、夏）

梅の花あかぬ色香も昔にておなじかたみの春の夜の

夢

(同卷一、春上)

風通ふねざめの袖の花の香にかをる枕の春の夜の夢

(同卷二、春下)

露払ふ寝覚めは秋の昔にて見果てぬ夢に残る面影

(同卷十四、恋四)

おもかげの霞める月ぞやどりける春や昔の袖の涙に

(同卷十二、恋二)

この最後の歌だけをとっても、助詞「に」で終わる余韻。その余韻の中には涙に潤んだ目が追い求める愛する人への面影が糸を引くように、あるいは流星のよう垣間見た光がある。

ライバルでもあった宮内卿にはないこの修辞の妙。彼女の代表作ともいえるこの四首を味わうだけでも、望外の喜びだ。その香りたつ言葉の裏にひそかに息づく人生の機微。定家の妖艶とは一味ちがった夢うつつの世界。それは危うい新古今の世界の終焉を匂わせて

はいないか。

塚本はこれを迦行的な幻想重畳法と言っている。

さらに、いみじくも「芸術は致死量すれすれの毒によつてその完全な美を支えている」と語っている。だからこそ彼女は、それらを踏みにじるような新勅撰集を許せなかったのだ。

「新勅撰集はかくれ事候はず候。(中略)其事となき院ばかり御製とて候事目もくれたる心地こそし候ひしか。歌よく候らめど御つま点あわされたるはいださむと思召しけるとて、入道殿のえり出させ給ふ歌七十首とかや聞え候ひし。かたはらいたやとうち覚え候ひき。」

「新勅撰集」を「かたはらいたい」とまでバツサリ切り捨てているのである。為家に残したこの弾劾の言葉の激しさは、新古今の歌人を代表して恨みつらみをぶちまけているのである。塚本も「新勅撰集のもつ性格、歌風そのものが彼女には花を棄てた空しい実、詞と共に心をも喪った詞華集の形骸に見えたのだろう」と言っている。同感である。

通親の子・通具の妻になったが、その愚夫通具は出世のためにさっさと彼女を棄てて権勢をふるって

た従三位按察局に乗り換えた。それ以後も彼女は愚夫を恋慕し続けるのだが、やがて形見の具定にも先立たれている。

だが専横傲慢・物欲のかたまりで、蠶蹙の極みと言われた後鳥羽院の乳母、卿二位兼子が群盗に襲われて、蓄財をすべて奪われ失意のうちに没した末路と比べればどれだけ幸せだったことだろう。

内心、ざまあみろと思っていたかもしれない。いやいや、心優しい彼女のことだもの、そんな下司なことは考えまい。むしろそんな想像をした自分が恥ずかしい。さて本題に戻ろう。

武蔵野の草のゆかりに鳴く雉子春はむかしの春ならねども

しのばじなわれも昔の夕まぐれ花たちばなに風は過ぐらむ

(俊成卿女集)

隠棲して越部禅尼と名乗ってから望郷の念のよう
に昔を懐かしむのは、当然と言えば当然であった。

話を戻そう。元久元年、後鳥羽院から「定家、家隆、押小路女房（俊成卿女のこと）の三人を巻首に立てよ」と和歌所寄人にお達しがあったのは三月二日の宴に備えてのことだった。これだけでも望外のことだが、すでに押小路女房とまで名が呼ばれていたからには、すでに確たる名声があったからに他ならない。（当時はよほどのことがない限り、紫式部や清少納言のように女房を固有名詞で呼ぶことはなかった。）

下燃えに思ひ消えなむ煙だにあとなき雲のはてぞかなしき

この歌が新古今和歌集恋二の巻頭を飾ったとき、彼女はどれほど有頂天になったことだろう。それゆえに新古今の世界は彼女のすべてとなった。こうした恩も忘れなかったはずだ。

だから後年、新勅撰集に入った北条泰時の歌

世の中に麻はあとなくなりけり心のままの蓬のみして

に対して彼女が憤り、

きみひとりあとなき麻のみを知らばのこる蓬がかず
をことわれ

と読み送ったところ、泰時は毅然と襟を正して応え
たという逸話が残る。

一方、若くして逝った天才、宮内卿はまさによきラ
イバルだった。父は師光、兄は具親という和歌の名門
に連なる一人。良経、雅経らとともに後鳥羽院に愛さ
れたが二十歳にも満たない短い生涯だったから、その
輝きはまたひときわまぶしい。

うすくこき野辺のみどりの若草にあとまで見ゆる雪
のむらぎえ

(新古今和歌集巻一、春上)

この有名な一首に院は早熟の天才性を認める。

「草の緑の濃きうすき色にてこぞのふる雪の遅く早
く消えるほどをおしはかりたる心映えなど、未しから
む人はいと思ひよりがたくや。この人年積もるまであ

らましかば、げにいかんばかり目に見えぬ鬼人をも動か
かしましに、天くしてうせにしいと惜しくあた
らしくなむ。」

これ以上の褒め言葉はないだろう。天折の口惜しさを
代弁した眩しいばかりのいいようである。

花誘ふ平良の山風吹きにけり漕ぎ行く舟のあと見ゆ
るまで

(仙洞句題五十首)

逢坂やこずゑの花を咲くからに嵐ぞかすむ関の杉む
ら

(同)

思ふことさしてそれとはなきものを秋の夕べを心に
ぞとふ

(和歌所歌合)

わずか三年にも満たない創作活動の内に、俊成卿女
とはまた違った雅とうつろう心がここにはある。誰が
否定しようとも、新古今の面白さは奥が深いのだ。尽

きせぬ泉のごとく煌びやかな世界が出現する歌の数々。読むたびに心がワクワクするのは私だけではない。まいと勝手に想像する。

お腹が減ったので補給のため地上に上がる。武士は食わねど高楊枝とはいかない(と、前にも同じことを書いた記憶がある)。国会では裁量労働制問題で揺れているが、ましてや労働者階級のなれの果てなれば、働くことと食べることは自然の摂理、あとの祭り。人体の不思議を感じる瞬間である。

船の上では外国語が波打っている。

喫水線の下ではずぶ濡れになったネオンテトラがクマノミをいじめている。ボーダーレスな世界になったよな。

ちやうど孫のナンバー3であるアキラが母の飛鳥とやってきた。漢字で煌と書く。幼稚園では、いま流行りの芸人の名前で呼ばれるから嫌がっている。

「アキラ100パーセントよく来たな」と言ったら「ジイジ100パーセントうるさいよ」と返された。自分勝手にわがまま、ブロックで遊んでいてもすぐに飽きて「つまんない。お腹減った。コンビニ行こう」

となる。そんな時は「何だ、アキラ90パーセントになっただか」と揶揄する。

一人っ子はみんなこうなのだろうか。日本の将来が心配だ。(自分の子ども頃のことを棚に上げて言うなよ、とどこからか聞こえた)。

さて天気がいいからガキを家の外で遊ばせるか。時には人間だってお天道様に向かって両手を広げ、光合成するのも必要なのだ。

わがままだっていいじゃないか、人間だもの。(相田みつおさんごめん。)

すっかり頭が発光ダイオードになっている(と日ごろから後ろ指さされる)オイラってバカにみえる?そんな馬鹿な。

それなら馬鹿の語源を知っているかい?

昔々その昔、秦の始皇帝には二人の息子がおりました。長男・扶蘇と次男の胡亥だ。扶蘇は頭がよく切れ、父帝にもはつきり物申したという。そのため煙たがられてしまいには僻地に飛ばされてしまう。一方弟の胡亥は無能とみなされていた。老宰相・李斯はすでに力なく、実権を握っていたのは悪名轟く趙高だったので

ございます。

彼は皇帝の座を狙って胡亥の失脚を画策する。それはある宴会でのこと。鹿の頭を「馬でございます」と言って献上した。胡亥は「鹿ではないか」という。そこで居並ぶ皇帝の部下たちに「これは馬か、鹿か」と言わせ。後日、「鹿」と言った正直者の武将たちをことごとく暗殺した。キリスト教の踏み絵のようなものである。そして「裸の大將」になつた胡亥をついに自害に追い込んだ。

西安の北にある胡亥の墓には「指鹿為馬」（鹿を指して馬となす）と書かれた人形が置かれている。

もつとも本来の馬鹿とは、権力者の無理難題にも「ごもつともでございます」とモミ手をしながら頭を下げた風見鶏のような役人のほうをいうのだらう。どこにでもいるよなく。そんな人。

な、な、なんと、間が射したか天罰か。

3月に入つていつも招待状をいただく井上郷子さんのピアノリサイタルに行く日の午後、ベランダの洗濯物を取り込もうとして敷居にぶつかり親指の爪をベリベリツとはがしてしまった。

痛い痛くないのって（どっちじゃ！）。半端じゃありません。半年前から飲んでる血液サラサラにする薬のせいもあって血は流れ放題。出血大サービスとあいなつた。

日曜日なので救急病院を探してタクシーで。結局爪のうえから何針も縫ってようやく治まった。それにしても麻酔の痛い事。まるで盗人に追い銭だった。

思わず「オー・マイ・ガーツ」「親の因果が子に報い：可哀想なのはこの子でござい」と口ずさんだくらいだ。

ちなみに当夜の演奏会は「渋谷由香／渡辺俊哉作品集」というタイトル。残念ついでにその曲目を書いておこう。（自分ながら未練たらしいなあ。）

渋谷由香「コスメティック・ダンス」「海にとける雲、空に浮かぶ島2」「時の箱」。そして渡辺俊哉作品は「ピアノのために」「波」「2台のピアノの（静物）」。そしてそれぞれの委嘱作品だった。

井上郷子さんを知らない人のために言うと、近藤譲の全曲演奏やモートン・フェルドマン作品のなど現代音楽の演奏家として、海外でも高い評価を受けているピアニストだ。むしろ海外の方が有名なくらいで、

リール大学やカイロ音楽院、カリフォルニア芸術大学、ギルドホール音楽院のマスタークラスなどに席を持つ。国立音大教授でもある。いや、それにしても聴きたかったな。反省しきり。ドジツた自分にあきれております。返すがえすも残念至極の極みでありました。